

〔論文〕

「教職論」における受講生の教師像と教職観

國原 幸一朗

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

教職科目「教職論」のワーク・コメントシートの記述内容をもとに受講生の教師像と教職観の多様性を明らかにした。初回の授業で、多くの受講生は「熱意があり、生徒のことをよく理解しているとともに、授業も分かりやすく、しっかりと指導でき、生徒の相談にも乗れる」教師を目指しているが、現実の教員に対しては組織や人間関係に苦勞している印象を持ち、教職に対しては学び続け、様々な考え方に柔軟に対応する必要があると考えていた。この教師像と教職観は授業と通してどう変化したか。講義では教員の具体的な指導場面を想定して教員の役割や職責を考えさせ、そのことを通して自分が目指す教師像を具体化し、自己の資質と能力を高めていこうとする当事者意識を持たせようとした。受講生の全体的な特徴をふまえながら、学年・教科・性別をもとに抽出した5人の受講生の教師像と教職観を明らかにした。

キーワード：教職論，教師像，教職観，当事者意識，多様性

Students Images of Teachers and Perceptions of Teaching in the Class

Koichiro KUNIHARA

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

発行日 2017年2月28日

1. はじめに一問題の所在

1.1 本研究の背景と研究目的

愛知県にある 50 大学中、中学校・高等学校の教員免許状（社会・英語・保健体育）を取得できる大学は 31 大学ある。しかし教員免許状を取得できても教員になるのはむずかしい。教職は経済的に安定し働きがいのある職と考えられているが、学生が理想とする教師像と学校現場の教員との間には相違が認められる。

1998 年の教育職員免許法改正で「教職に関する科目」の単位数が増加し、「教職の意義等に関する科目に関する科目」と「総合演習」が新設された。それに伴いカリキュラムや指導方法まで検討が加えられるようになった。教職課程における「教職論」の位置付けについては、高橋・榊原・大和（2004）が「現代教職論」を事例として述べ、複数担当者に見られる授業内容と方法等の類似点と相違点を明らかにした。また霜川・村上・岸本・佐々木・鷹岡・高橋・中村・西岡・長谷川（2011a）は「教職概論」を教員養成カリキュラム、教職と学校教育、教職キャリア形成にかかる基礎的知識を理解させる科目とみなし、受講生のキャリア形成を支援する科目と位置付けている。さらに、中瀬（2015）は授業を通して受講生の教職についての理解は深まり、教職への志望が強まった一方、教職に対する不安が高まっていると述べ、他の教職科目との連携や教職センターの役割が重要であると指摘している。

中西（2015）も教員を取り巻く社会状況、教職の制度的側面とその課題、現代日本の教員に要請される職能について理解させる科目として「教職概論」を位置付けているが、現場教員の視点から捉え直す、教科担当者が自分なりの認識や見解を語り受講生に熟考を迫ることが必要

であるとの指摘に着目したい。

さて、多くの大学の教職課程では教員を強く志望している受講生よりも、とりあえず資格の一つとして教員免許状を取得しておきたいと考えている受講生が多い。山崎（1981）も「母親になったときを想定して」「資格取得のために」教員免許状を取得している学生が多いと指摘する。この現状に加え、岩田（2013）は「開放制」下では学士レベルの教員養成教育の質的向上策が機能していないと述べ、各大学に課せられている「絞り込み」機能が弱いと主張している。しかし近年「教育実習」が教職課程の科目内容や指導方法に影響を与え、外部機関の要請により受講生を絞り込んでいる部分がある。大学では受講生の教職への関心を高め、自己のキャリア形成を着実に行わせて、学びの成果への影響を示す必要がある（霜川・村上・岸本・佐々木・鷹岡・高橋・中村・西岡・長谷川，2011b）。

今後、全学的に 4 年間全体を見通した教職カリキュラムと各科目の授業内容・方法の検討が進むと考えられるが、その一步として受講生の学びの動機づけとなる「教職論」における受講生の教師像と教職観を多面的・多角的に捉え、その変化をみておく必要性はあると考える。本研究では「教職論」を通して受講生の教師像と教職観を明らかにしたい。

1.2 研究の方法

本研究では筆者が担当した「教職論」の授業（1～4 年生，77 人受講）で用いたコメント・ワークシートに記述された内容をもとに考察する。本研究に関係する記述を抽出し、学年・教科間で比較するとともに、5 人の受講生の記述に焦点を当て、第 1 講から第 15 講までの記述内容を、生徒との関係、教科指導、教員社会、ライフコースの 4 つの側面に分けて類似点と相違

点を整理する。そのことにより、受講生に応じた授業内容と方法を検討する一助となるのではないかと考える。

2. 「教職論」の視点と授業方法

2.1 授業の視点

「教職論」の授業の視点として、山崎(2012)は資料読み取りや事例研究を通して教員の役割や職責を理解させる、事例研究を通して教員としての職責を果たすために必要な資質・能力を理解させる、自分が目指したい教師像をもたせ自己の資質と能力を高めていこうとする意欲を持たせることを挙げているが、これらの点は筆者の授業でも取り入れている。

また金丸(2015)は受講生の当事者意識に着目し、定期試験の解答内容を教師の立場、自己への投影、第三者的な視点に区分して、自己への投影ができる受講生を高く評価しているが、第三者的視点で自己を相対化できる能力も求められている。そこでは記述量が少なく短文となりがちであるが、記述量で当事者意識の高低を判断することはできない。他の課題の記述内容もあわせて総合的にみる必要がある。

大学では学校現場の教育関係にとらわれず、教職に対する批判が述べられる環境を保障する必要がある(霜川・村上・鷹岡・高橋・長谷川・久保田, 2012. 高橋・榊原・大和, 2004)。社会や学校現場の状況をふまえ、自らの教師観や教職観をもとに当事者意識を持って自らの問いに向き合い、教師観や教職観を再構築していく学びが必要である。

2.2 授業方法

授業の方法として、霜川・村上・鷹岡・高橋・長谷川・久保田(2012)は①教師の立場で考える、②教師としての心構えを考える、③自己の

在り方や課題を考えるという順に授業を組み立て、①～③の各段階で学習内容・方法・形態を変えらることにより、受講生の授業評価がよくなると述べている。筆者の授業では①～③の各段階を設定し、適宜順序を変え、グループで話し合う、個別に考える、コメント・ワークシートに書き込む時間を確保している。

大和・榊原(2003)も教授よりも学習を先行させる授業が受講生に成就感をもたらし、受講生間・受講生と教員間のコミュニケーションを活発にすることができ、対話重視の授業は実践的指導力の基礎を培うと述べている。対話は重要であるが、一部の受講生は対話型の授業、相手から聴くことに拒否感を示すこともあるため、受講生に合わせた授業を想定する必要がある。

榊原・高橋・大和(2005)はコンフリクトに注目し、教職観・子ども観を問い直す授業を行い、自らの枠組みを批判的に捉え直させようとした。具体的な指導場面を想定したテーマと内容を授業で取り扱っている。筆者の授業でも具体的な実践場面を設定し、教員としてどう対応するかを考えさせている。

また下地(2015)は教職履修の総括となる「教職実践演習」の成果と課題を踏まえ、それらを「教職概論」に活かし、グループ討論を多く取り入れることを提案している。卒業時の到達点をもとに1年次に何を教えるかを検討することは重要であるが、異学年の受講生との話し合いに不慣れな受講生がうまく話し合いに参加できる工夫が必要である。

2.3 本授業の特色

「教職論」の授業は新井・江口(2015)を教科書とし、表1に示す内容について毎回コメント・ワークシートを配布して自分の考えを書かせ、適宜周囲の受講生と相談して様々な考えを

まとめさせた。

田代・佐々木・金田・川野（2012・2013）は32の「教職論」の教科書をもとに教育内容を分類している。本講義で扱う教科書にも当てはまるが、教職が人間関係を重視するにも関わらず、子ども・同僚・保護者・地域住民といった対人関係に関する記述が少ない。そのため筆者の授業では第2講で生徒との関係、第3講で同僚との

人間関係についての講義を行うこととした。前半はほぼ毎回レポート課題とグループワークを課し、後半は小テストを実施して教科書の内容と提示資料について知識の定着を図ろうとした。レポート課題はインターネットや聞き取りで情報収集したことをもとに取り組めるものとし、レポート内容は次時の講義で話し合いや発表に活用した。小テストは自己採点、訂正して提出

表1 教職論の講義内容

テーマ	講義内容	ワーク・コメントシートの内容
【第1講】 教員の役割と教職	教職の人気，教員になるための条件と役割	・教員になりたいきっかけ ・教員のイメージ ・現実の教員と目指す教師像
【第2講】 教員と生徒の関係	職務内容，教員と生徒の関係 懲戒と体罰	・教員と生徒は対等か ・教員は子どもから教えられるか
【課題】 教員・生徒間，教員間の人間関係に関する問題事例とその原因		
【第3講】 教員間の人間関係	学校組織の一員としての教員 教育公務員としての教員 ソーシャルスキル	・課題と対策の整理 ・教員としてすべきこと
【課題】 ソーシャルスキルを高める方法		
【第4講】 教師像の変遷	聖職論，労働者論，専門職論	・課題整理 ・自分の教師像 ・教師像による生徒との関係の相違
【課題】 よい教師の条件		
【第5講】 教員の資質と能力	教員に求められる資質と能力 学校種別にみる資質と能力	・課題整理 ・求められる資質能力 ・重視，改善したい資質能力とその理由
【第6講】 実践的指導力	実践的指導力，職責遂行 子ども・保護者・同僚との関係	・実践的指導力 ・求められる職責 ・教員としての人間関係の対応
【第7講】 事例研究	具体的事例の原因、対応	・3つの事例について教員としての対応
【第8講】 教員社会	教員社会，学校組織 教員集団とその機能	・教員社会と企業社会の違い ・今と昔の教員社会の違い
【第9講】 教員文化	教員文化とその特質，機能	・教員に特有の見方や考え方
【第10講】 ライフコース	教育実習，教員になる動機，新任期，中堅教員，バーンアウトと葛藤，ベテラン教員	・教育実習の意味と経験内容 ・なぜ教員になるか ・新任期/中堅期で身に付けること ・なぜ転職，燃えつけるのか
【第11講】 教員養成制度	師範学校，開放制，免許制度 教員養成制度の現状と課題	・履修状況の確認 ・開放制をどう考えるか ・なぜ更新講習があるのか
【第12講】 教員採用と研修	教員採用制度，教員研修制度 法的根拠，研修制度の問題	・教員採用制度と試験の現状と動向 ・なぜ研修制度があるのか
【第13講】 教科指導	教科の意義，学習指導要領 教科指導の原理・原則，教材，評価	・教科固有の役割と使命 ・国民や市民に求められること
【第14講】 社会の変化と教員	知識基盤社会，生きる力， 持続可能な社会の形成，不易流行	・道徳で何をどう教えるのか ・総合的な学習の時間と教科の関係 ・社会と教育の関係，指導法，不易流行
【第15講】 振り返り	補足解説	

させ、評価はテストの出来だけでなく修正が行われていることも加点した。小テストの問題は学期末試験にも用い、受講者のモチベーションが下がらないよう配慮した。

またワーク・コメントシートへの記入については、まず自分の意見を書かせてから、それをもとに周囲の受講生と交流させて追記したい・発見したことを書かせた。自分の書いたことを人に見せ、話し合うグループワークを嫌う受講生も数名いたが、今後増加するアクティブラーニングや教育実習、教員採用試験等を考え、活動の意味を説明して学習を継続した。

講義内容は教科書にもとづいているが、具体的に考えさせる内容は、受講生の身近に感じられる具体的な題材とし、個別に考えさせるか受講生同士で話し合いまとめさせた。ワーク・コメントシートの分からないところを空白にせず、他の受講生や担当教員に聞いてヒントを教えてもらい、自分の言葉でまとめる「問題解決能力」も問われていることを強調した。

成績は試験（60%、小テストにもとづく問題）と課題等（40%、レポート課題とワーク・コメントシート等）を総合して算出し、努力する者が報われるよう配慮している（図1・2）。

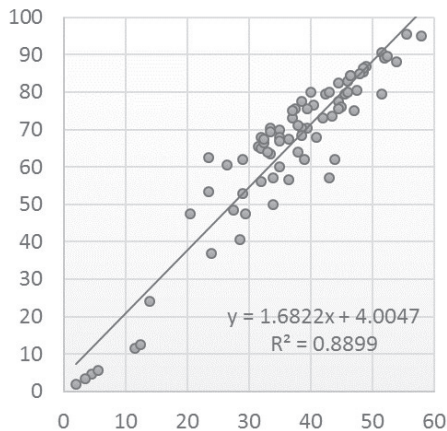


図1 成績（縦軸）と試験得点（横軸）の関係

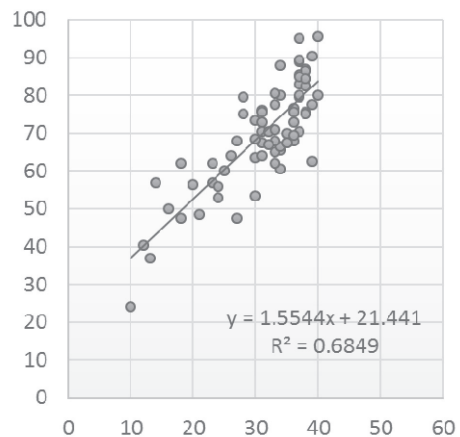


図2 成績（縦軸）と課題得点（横軸）の関係

3. 初回の受講生の教師像と教職意識

まず受講生全員の教員志望理由、尊敬する教員、現実の教員と目指す教師像の特色について述べる。受講生を学年・学部別にみると（表2）、教職スタート科目であるにも関わらず、3年生以上が15.6%履修し、1年生は46.8%を占めている。5学部の学生が履修しており、商学部が44.2%、外国語学部が32.5%を占めている。

教員を志望する理由としては受講生の71.5%が母校の教員、9.1%が家族の影響を受けてい

る（重複回答）。とくに授業担当教員（18.2%、3年生に多い）や部活動顧問（16.9%、2年生に多い）の指導に憧れて教員になりたいと思っている者が多い。表中の「恩師」は部活動や教科、担任など詳細の分からないものである。商学部の受講生は部活動顧問の影響を強く受け、外国語学部の受講生は授業担当者の影響を受けているか、もともと教えるのが好きな者が多い。

受講生は指導が熱心で、生徒のことをよく理解している教員を尊敬している。相談に乗って

くれ支援してくれる教員は受講生に近い存在のためか、尊敬する対象となりにくい。外国語・現代社会・法学部の受講生は分かりやすい授業を行い、生徒をよく理解している教員を評価している。

尊敬する教員から理想の教師像が読み取れるが、現実の教員に対してどのような印象をもっているだろうか。肯定的なイメージをもつ受講生は31.2%、否定的なイメージをもつ受講生は89.6%である（重複あり）。1年生は教員個人に対する肯定的・否定的見方が強く、学習者の立場で教員をみている。3年生になると組織や人間関係の中で教員をとらえ、教員との距離もやや近くなっている。成人年齢に達することと関係があるだろうか。外国語・現代社会・法学部の受講生は授業に注力する教師像をより強くもっている。

また教員に求められる能力を受講生の記述から「知力」「精神力」「技能」「会話力」に区分すると、学年によりばらつきがみられるが、多くの受講生は「知力」を上位に挙げている。

「技能」の値が学年とともに減少しているのは技能が経験とともに身に付くという意識の表れ、「精神力」の値が3年に増加するのは、体験実習や教員採用試験の準備が本格化し、タフな精神力が要求されることを意識するためと考える。どの学部の受講生も「知力」を最も重視し、次いで多くの学部の受講生が「会話力」を挙げているが、「技能」や「精神力」はばらつきが見られる。

さらに目指す教師像について書かせたが、その記述をもとに「支援」「授業」「指導」「生徒理解」「熱意」に区分し、学年や学部による相違を見ると、1年生は厳しい指導と生徒支援の両面を求めているが、3年生は生徒理解や熱意を求

めている。商学部は「生徒理解」の値が高いが、「授業」の値が低い。その一方、外国語学部は「授業」の値が高い。本科目の受講生を見る限り、3年が意識の変わり目と見ることができ、授業に対する教員のイメージが強い受講生と生徒指導・理解に対する教員のイメージが強い受講生に分けられる。1・2年と3・4年、商学・経済学部と外国語・現代社会・法学部の間に教師像と教職観の相違が見られる。

このことをふまえ、学年・学部（教科）・性別をもとに5人を抽出した（表3）。次に講義毎の記述内容を比較検討してみたい。

表2 受講生の教師像（第1講）

（重複回答あり）

	計 (%)	学年 (%)				学部 (%)				
		1年	2年	3年	4年	C	E	F	G/L	
計 (人)	77	36	29	10	2	34	14	25	4	
教員志望理由	家族	9.1	2.8	17.2	10.0	0.0	11.8	7.1	8.0	0.0
	恩師	27.3	33.3	24.1	10.0	50.0	29.4	21.4	28.0	25.0
	部活動顧問	16.9	11.1	27.6	10.0	0.0	29.4	14.3	4.0	0.0
	授業担当	18.2	22.2	10.3	30.0	0.0	11.8	7.1	36.0	0.0
	担任	9.1	11.1	0.0	20.0	50.0	11.8	7.1	8.0	0.0
尊敬する教員	教える好き	11.7	5.6	6.9	50.0	0.0	2.9	0.0	32.0	0.0
	支援	22.1	13.9	31.0	20.0	50.0	23.5	14.3	24.0	25.0
	授業	31.2	30.6	24.1	60.0	0.0	14.7	21.4	56.0	50.0
	指導熱心	50.6	47.2	58.6	50.0	0.0	47.1	64.3	52.0	25.0
現実の教員	生徒理解	35.1	25.0	37.9	70.0	0.0	26.5	28.6	48.0	50.0
	肯定的	31.2	33.3	34.5	20.0	0.0	35.3	35.7	20.0	50.0
	否定的	89.6	88.9	89.7	100.0	50.0	88.2	78.6	96.0	100.0
	授業	9.1	11.1	6.9	0.0	50.0	5.9	7.1	12.0	25.0
	人間関係	45.5	33.3	58.6	50.0	50.0	50.0	57.1	32.0	50.0
要求される能力	組織	9.1	2.8	10.3	30.0	0.0	8.8	0.0	16.0	0.0
	個人	77.9	86.1	72.4	80.0	0.0	67.6	78.6	92.0	75.0
	知力	85.7	94.4	79.3	70.0	100.0	79.4	92.9	92.0	75.0
	精神力	53.2	61.1	51.7	90.0	100.0	76.5	64.3	64.0	50.0
目指す教師像	技能	77.9	83.3	75.9	70.0	50.0	55.9	57.1	72.0	75.0
	会話力	68.8	55.6	89.7	60.0	50.0	76.5	85.7	80.0	50.0
	支援	79.2	41.7	37.9	40.0	50.0	41.2	21.4	44.0	75.0
目指す教師像	授業	80.5	33.3	20.7	40.0	0.0	14.7	35.7	44.0	25.0
	指導	81.8	47.2	41.4	20.0	0.0	41.2	42.9	44.0	0.0
	理解	83.1	36.1	48.3	50.0	0.0	52.9	21.4	40.0	25.0
	熱意	84.4	33.3	20.7	60.0	0.0	29.4	28.6	32.0	50.0

(学部) C 商学部, E 経済学部, F 外国語学部,

G 現代社会学部, L 法学部

表3 抽出した5人の受講生(A~E)の教師像(第1講)

受講生	学年	性別	教科	教職志望動機	尊敬する教員	現実の教員の印象	教員に求められる能力	目指す教師像
A	4	女	商業	高校の担任の先生のようにになりたいと思った	未記入	未記入	使命感 人間の発達や成長についての深い理解 教育的愛情 教科等に関する専門的知識 広く豊かな教養	未記入
B	3	男	英語	物事を教えたり相談に乗ることが好き	優しさと厳しさの両面を持つ 生徒の気持ちをしっかり理解できる 生徒と対等に話ができる	忙しい 授業以外の仕事で苦勞している	考える力 コミュニケーション 楽しむ 状況判断 生徒をやる気にさせる 協力	生徒の気持ちを理解できる 生徒と対等な立場で話ができる
C	2	男	体育	中学校で出会った体育の先生にあこがれた 何事にも一生懸命に取り組み真剣に生徒たちと向き合っていた	熱心 一生懸命 優しい 笑顔 一緒に遊んでくれる 挨拶をしてくれる	忙しい 朝が早い 休みがない ひいきがある 帰りが遅い	判断力 行動力 決断力 思いやり 感謝の気持ち	笑ってあいさつを交わす 熱心 目標とされる 尊敬される 何年後も連絡をくれる
D	1	男	社会	嫌がらせを受けたとき担任の先生が助けてくれた 体験したことを生徒に伝えたい	誰にでも気軽に話せる 物知り	気軽に話せる 生徒に手を出す 忙しそう	学力 教える力 継続力 一般教養 生徒理解 コミュニケーション 話す力	生徒と関わりやすい 生徒を助けたい 忙しくても生徒のためにする 生徒にからかわれても手を出さない
E	1	女	英語	時間をかけて分かってもらおうという先生の一生懸命な姿に心を打たれた	自分の気づかなかったことを指摘していい方向に導いてくれる 授業が一方通行でなく生徒もしっかりと参加させようとしてくれる	忙しそう 教師自身のペースで授業している 追いついていない子は放っておく いろんなことに精一杯	教科の学力 人間観察 メンタル 人間性	困ったら自分を頼りにしてくれる 自分の授業方針ばかり押し付けられない 心にゆとりを持つ 自分でも学校行事を楽しむ

4. 抽出した5人の受講生の教師像と教職意識

まず授業開始時の5人の受講生の教師像について述べておきたい。教員志望理由は受講生Bを除き母校の教員の影響による(表3)。外国語学部(英語)の受講生Eは教える側面が見られ、尊敬する教員の記述にも表れている。現実の教員に対しては多くの受講生が「忙しい」イメージを持ち、よくない印象を持っている。

次に教員に求められる能力としては全ての受講生が対人関係に関することを挙げているが、その他は教科により相違が見られる。目指す教師像として「生徒理解」「授業」「熱意」に関することが挙げられている。

4-1. 教員と生徒の関係からみた教師像

最初に「生徒理解」について、とくに教員と生徒との関係について、第2講におけるワーク・コメントシートを見ると、受講生Bを除く受講生が教員と生徒の間の関係は対等でないとら

えている(表4)。受講生Dは、対等でないことを前提として、教員が話しかけやすい環境をつくる必要があると指摘している。

全受講生を見ると、多くの受講生が「教える・教えられる関係」であり、対等でないとらえているが、5.2%の受講生が対等であると考えている。対等である理由として「対等でなければ心は開けない」「悩みを相談できない」と述べている。また教員の持つ懲戒権や評価権についても解説したが、懲戒と体罰について、「懲戒は必要だが体罰は反対」という受講生が36.4%、体罰を反対する理由として「教員の自己満足」「心に傷が残る」「暴力の再生産」を理由として挙げている。しかし受講生の23.4%は体罰を条件付きで賛成し、「何度言っても言うことを聞かない場合には行ってよい」「軽く頭をたたく程度はよい」「ある程度は認められる」と述べていた。5人の受講生をみても「よくない」

と明言したのは1人（女性）だけで、その他ははっきりと意思表示していない。

さらに調査課題として教員と生徒間、教員間の人間関係の問題事例とその原因をレポートにまとめさせた。講義ではそのレポート内容をもとに内容と原因の共通点をグループで確認させ、解決策を話し合わせた。受講生5人のコメントを見ると、受講生Aは告発できない雰囲気の問題を問題とし、受講生Bと受講生Dは教員と生徒双方に問題がある、受講生Cも教員の責任を指摘し、受講生Eは改善方法を提案している。

改善方法として多くの受講生が会話力を高めることを挙げている。そこで、ソーシャルスキルを高める方法、とくに学校現場の教員がどのような研修を受け取り組んでいるかを調べさ

せ感想を書かせた。

学校現場の教員に対して否定的な記述が目立ったが、授業では教員を目指す受講生に厳しい現実や苦勞を具体的に提示して「揺さぶり」をかけつつ、教員の「生きがい」や「やりがい」を示し、教職への関心をさらに向上させようと工夫した。抽出した受講生はいずれも教職の大変さを感じながらも、自らの成長も味わえる点を指摘している（表5）。

その上で、優れた教師に求めることを列挙させた（表6）。5人の受講生が前提として「生徒を大切に思うこと」、受講生Dと受講生Eが「仕事を楽しめること」を挙げている。多くの受講生が「知識が豊富なこと」を求め、教師の心がけや姿勢に関することを多く挙げている。教職

表4 抽出した5人の受講生（A～E）の「教員と生徒の関係」に関する記述

	A（商業）	B（英語）	C（体育）	D（社会）	E（英語）
【第2講】 生徒との関係	<対応でない> 教員が全責任を負う	<対等> 両者が必要である	<対等でない> 教員は尊敬される	<対等ではない> 生徒の気持ちを理解する話しかけやすい環境をつくる	<対等でない> 教える・教えられる
懲戒と体罰	<限定的否定> 体罰は度を越す	<限定的否定> 身体に触れることすべてが体罰ではない 懲戒は本人や周りの生徒に気付かせる効果がある	<方法> どうしたらよいかを考える必要がある	<捉え方> 教員と生徒の捉え方の違いを知る必要がある	<否定> どちらもよくない
【第3講】 問題の原因	<環境> 告発できない雰囲気がある	<教員と生徒> 教員と生徒双方に問題がある	<教員> 教員にも原因がある	<教員と生徒> 生徒も教員も悪い	<改善> 生徒のことをよく理解し環境をよくする
対策	<聴く・情報共有> 情報共有する 悩みを聞いてあげる	<聴く・情報共有> コミュニケーションをとる 近況報告する	<情報共有> コミュニケーションをとる 挨拶する	<支援・情報共有> 生徒を助ける コミュニケーションをとる	<相談とケア> 誰かに打ち明ける 定期的に精神面をケアする

表5 抽出した5人の受講生（A～E）の「現場の教員の声」に対する感想

	A（商業）	B（英語）	C（体育）	D（社会）	E（英語）
【第5講】 現場の教員の声の感想	<やりがい・日々研究> 子どもから笑顔がもたらされた時に教師としてのやりがいを感じる 子どもとの交流は教師だからできると思っていた 日々研究することが多い	<やりがい・日々研究> 一つのことには一生懸命になれるのはとても大切である	<柔軟性・意識> 様々な考え方を持てて教師という仕事と対峙しているのだと改めて気づかされた 中学校や高校の頃の恩師が何を考え何を目的として我々と向き合っていたのかがわかる	<日々成長・魅力> 毎日新しいことにチャレンジし続けることができ、生徒とともに自分も成長できることが魅力であること 人のかかわりの中で、己を成長させることができる 非常に魅力ある職業である	<公平・印象> なるべく全員と接しようとしていても自分では気づかずに1人の子と多く会話をしているのを子どもたちはよく見ている 何年たっても忘れられない先生になりたい

「教職論」における受講生の教師像と教職観

表6 抽出した5人の受講生(A~E)が挙げる「優れた教員に求めること」

受講生	教科指導と生徒指導に共通する							教科指導		生徒指導	
	経験豊富	個性尊重	冷静	前向き	真剣さ	信頼	迅速さ	知識豊富		学習指導	生活指導
A											
B	厳しさ	言行一致	話し方	柔軟さ	成長の実感					学習指導	生活指導
C	優しさ	公平公正	切り替え	熱意	会話	信頼		知識豊富		挨拶	相談
D	手を出さない	生徒一番	生徒理解	熱意	人柄			知識豊富			
E	リーダーシップ	根性						知識豊富	授業工夫	人生教える	

経験と関わるものとしては、受講生Aの「経験豊富」「信頼」、受講生Bの「話し方」、受講生Cの「会話」「信頼」、受講生Eの「生徒理解」などが挙げられる。

4-2. 教科指導からみた教師像

受講生は授業力も教師の重要な能力の一つととらえているが、講義ではまず教科の意義につ

いて考えを深めさせようとした。「教科固有の使命」「社会のために教科はあるのか」「見えにくいものを見えやすくする」「指導の形やあり方」「授業評価」「国民や市民に求められること」「不易なこと」の順にテキストの内容を参照して考えさせた(表7)。テキストは社会科学教育の立場で書かれているため、他教科にも

表7 抽出した5人の受講生(A~E)の「教科指導」に関する記述

	A (商業)	B (英語)	C (体育)	D (社会)	E (英語)
【第13講】 教科固有の使命	<スキルとマナー> ビジネスでも活かせるスキルやマナーを身につけさせる	<関心> 英語をもっと好きになってもらい関心を持たせる	<運動の楽しさ> 体を動かすことの楽しさを教える。将来の人間像の選択肢を与える	<地歴公の役割> 歴史では時代の流れ、公民では日本の今の状況、地理では地図の見方を教える	<英語が使える> 英語が使えるようになるまで子どもを支援する
【第13講】 社会のために教科はある	<仕組みと流れ> 社会の仕組みや流れを学び、マナーなどを身につけていく	<社会への影響> 外国語を通して社会に影響を及ぼす	<元気にする> スポーツは人々に感動を与え、社会を元気にしてくれるものだと思っている	<知識> それなりに知識をつけておかないといけない	<生活で必要> その通り、社会に出て日本語だけで生活していくのは難しくなっている
【第13講】 見えにくいものを見えるようにするにはどうすればよいか(教材化)	<身近なもの> 身近にあるものを通して何が起きているかを説明する	<外国人より情報入手> 外国人講師から情報を得る	<試合で体験> チーム力や協力する力が大きな成果を生む。一人が頑張っても歩調が合わないこと成功しないことを示す	<プリントで図示> プリントを使って図表に示す	<力をつける> 会話力や語学力を身に付ける。英語を使った職に就けたらよい
【第13講】 指導の形や在り方	<自立・人間関係> 自立できるように育てていく、人とのかかわりを多く持つ	<ともに学ぶ> 指導という形にとらわれない。教師と生徒がともに学ぶ関係が大切である	<生徒が動く指導> 言葉や行動で生徒が動く指導をしていく	<分かりやすさ> 生徒に分かりやすく教える	<本物にふれる> ネイティブスピーカーやリスニング教材など、なるべく外国の本物の環境に近づけて指導することがよい
【第13講】 授業の評価	<理解と方法> 理解できているか、ルールを守っているか	<努力を評価> 生徒が一生涯授業に取り組む、トライしたことを評価する	<目標と努力> 目標を立てて努力する姿勢が見られたら評価する	<態度も評価> テストだけでなく日ごろの授業態度も含める	<差別化> 必要であるが、子どもたちの中ではレベルや頭の良さが見えるので、いじめや仲間外れになりかねない
【第14講】 国民や市民に求められること	<会話、対応> コミュニケーション能力、社会の変化に臨機応変に対応できる	<会話力> コミュニケーションできる	<健康・スポーツ・会話> 健康な毎日を送る。身体を動かすことの楽しさを知る。人とのコミュニケーションの大切さを学ぶ。出会いを大切にする。次世代に受け継ぐ。地域同士で触れ合いの場を設ける	<政治への関心> 公民では政治や選挙、社会問題を取り上げ、若者の選挙離れを題材に政治に関心を持ってもらう	<英語を学ぶ意欲> 世界共通の言語である英語を学ぶ意欲が求められる。新しい言語を学ぶにはそれなりの勉強が必要で覚悟が求められる

配慮し具体例を挙げて解説した。

コメント・ワークシートに書かれた内容をみると、教科の特性がよく表れている。教科固有の使命と社会との関わりについて「商業」の受講生は「スキルとマナーを習得させる」、「英語」の受講生は「英語に関心を持たせ・使えるようにする」「英語が社会に影響を及ぼし生活が必要となっている」、「保健体育」の受講生は「運動の楽しさを理解してもらう」「社会を活性化させる」と述べている。

教材化・指導・評価については、「商業」の

受講生 A は「身近なものを利用する・自立を目指す・知識と方法の理解を評価する」、「英語」の受講生 B と E は「外国人より情報入手する・本物にふれる・努力を評価する」、「社会」の受講生 D は「プリントを使用する・分かりやすく解説する・授業態度も評価する」、「保健体育」の受講生 C は「試合で体験する・生徒が動く指導を行う・努力を評価する」と述べている。

国民や市民に求められることとしては、会話を 3 人の受講生が挙げている。

「不易なこと」としては (表 8)、信念やプラ

表 8 抽出した 5 人の受講生 (A~E) の「教員社会・ライフコース」に関する記述

	A (商業)	B (英語)	C (体育)	D (社会)	E (英語)
【第7講】 ＜事例1＞情報機器を用いた参観授業 (自分の学級) で準備すべきこと	＜学習内容・教材＞ 学習内容を決定する 必要なものを揃える 身近な教材を考える	＜機器確認＞ 情報機器を確認する 機器の動作確認をしておく	＜教材・教具＞ パワーポイントのファイルを作成する マットの準備をする	＜学習内容・方法＞ 生徒のやる気が出るような授業の内容を考える 一人一人が参加できるような雰囲気にする 保護者も参加してもらう	＜教材・学習方法＞ スライドを作成する 机を配置する 授業の流れをつくる
＜事例2＞学級担任として学級懇談で準備すべきこと	＜問題整理＞ 問題を整理する 家庭の様子を確認する	＜資料＞ 資料を用意する	＜当日の流れ＞ 机を並び替える 自己紹介する 子どもの様子を報告する 質問を受け回答する 希望者には個別に懇談する 後片付けを行う	＜事前から事後まで＞ 学級での様子を報告する 各生徒の良い点と問題点を整理する	＜当日の流れ＞ 最近の生徒の様子について報告する 保護者からの意見を受ける 対応を考える
＜事例3＞部活動の副顧問の立場で急遽引率責任者となった場合にすべきこと	＜事前確認・生徒指導＞ 要項を確認しておく 練習にて生徒の課題を克服し補助・指導する 様子を観察する	＜声かけ、方針＞ 全力を尽くそうと声かけする 監督の方針を変えずそのままのスタイルで試合に臨む	＜事前確認、当日指示＞ 試合日時と会場の確認 交通手段を検討 集合場所を指定 服装確認 必要金額の確認 荷物確認 公共の場での注意 顧問に報告する	＜事前確認、当日指示＞ 試合に出る選手を確認 正顧問より指示 当日指示 正顧問に報告する	＜事前確認、当日確認＞ 集合場所、時間などを確認 人数確認 体調確認する
【第9講】 教員社会について意見	＜教員の特性を生かす＞ 教員の特性を活かした指導ができないのか どんな指導をしていくべきかを生徒の立場で考えていくべきである	＜気分転換必要＞ 生徒の気持ちを考えず押し付けているところがある 多忙である たくさん仕事があるためリフレッシュする時間を意識的につくるべきでないか	＜同僚性の低下＞ 同僚性が弱まり凝集性が強まっている 個人の成果を重視する教員評価が導入され同僚性を低下させ、機能を変質させている	＜私用優先だめ＞ 集団よりも自分の都合を優先するのはよくない 生徒より自分の都合を優先するのはよくない	＜人間関係で苦労＞ 心の休まる時間が少ない 教員に求められる能力も変わっている 経験が長くても対処するのが大変である
【第10講】 教員のライフコースについて意見	＜女性不利＞ 教員は結婚、出産、出産後の復帰が難しいと考えている人が多いと思った	＜重視不要＞ 人生の道程 キャリア経歴 そこまで重視する必要はない	＜教育実習の役割＞ 教育実習はすばらしい貴重な体験ができる 新しい仲間ができる 自分の成長を促し自信となる	＜世代交流は必要＞ ベテラン教員が新任教員にアドバイスする交流は必要である	＜教育実習の役割＞ 実際の雰囲気を体験することは必要 いろいろな先生から得られることは多い 教えるのが好きなら充実が見出せる
【第14講】 不易なこと	＜信念・指導＞ 時代が変わっても自分の考えや信念、生徒に対しての指導は変えてはいけない	＜生徒目線＞ 生徒の気持ちを考える 生徒目線	＜家庭と学校の問題＞ 自分の子どもができた時ふれあう時間が取れない、家族の時間が取れない、家庭と学校の問題	＜生徒と学ぶ＞ どんなことがあっても生徒とともに学ぶことを忘れない	＜誇りとプライド＞ 教員としての誇りやプライド

イド（受講生 A と受講生 E）と生徒とともに歩む（受講生 B と受講生 D）を挙げ、教科の側面が弱い。

4-3. 教員社会からみた教職観

まず教員の指導場面を設定し、指導のために想定すべきことを考えさせた。経験に比例してその数は増加すると考えられるが、授業では経験と教科教育の学習の重要性に気付かせようとした。授業結果は受講生により記述量にばらつきが見られた。部活動の引率の事例は「保健体育」の学生に有利であったが、リスク管理（事故対応、傷病対応など）についての記述が少なかった（表 8）。

次に教員を取り巻く社会について、第 9 講と第 10 講で教員社会とライフコースについて理解を深めさせようとした。授業後のコメントを見ると、受講生 A は「生徒との関係をふまえる必要がある」、受講生 D は「生徒や仕事よりも自分の都合を優先するのはよくない」と限られた人間関係や職務に対する意識についての記述に止まり、教員社会について理解を深めるには至らなかった。

4-4. ライフコースからみた教職観

ライフコースについては、受講生 A（女性）が結婚・出産・育児の面から述べ、受講生 C と受講生 D は教育実習について述べていた。受講生 B は 3 年生であるが、ライフコースの重要性をそれほど感じず、一方 1 年生の受講生 D は世代交流の必要性について述べ、学年よりも個人差の大きいことが明らかとなった。

開放制教員養成課程において、1, 2 年の時点で卒業後の進路を教職一本に絞っている受講生は少ない。そのため教員としてのライフコースが描きにくく記述も少ない。ライフコースにつ

いて受講者の意識分析の結果は別稿で示す。

4-5. 本講義の感想からみた教師観と教職観

第 15 講で授業全体の感想と教職観（表 9）について書かせたが、初回と比較して授業を通して意識や考えがどう変化したかを読み取ることができる。

受講生 A は「教育に対する考えは未熟な面も多いし甘いことを教育実習で知り、それをふまえて授業を受けたのでいろいろと考え直せた」と述べ、経験と結び付けてとらえている。初回は教職への迷いと自信喪失が記述にも表れ心配したが、次第に克服して熱心に授業に取り組み変化していった。教職を日々研究することの多い仕事ととらえられるようになり、「学び続ける教師」を意識するようになった。

受講生 C は「小学校から高校までのお世話になった先生方の顔が浮かぶようになった。授業で現実を見せられた時、揺らいでいた自分が出たのは確かであった」と述べ、自分の生活に結び付けて当事者意識をもって捉えられるようになった。教職観については、様々な考え方を持って対応することや子どもからエネルギーをもらって仕事に励むことの大切さについて述べている。

受講生 D は「異なる学年の人たちとともに講義を受けグループワークで話し合いを行うのが苦手だったが、自分の意見が言えるようになった」と述べ、教職観については毎日新しいことにチャレンジし続け、生徒とともに成長するイメージを持つに至ったと回顧している。

受講生 E は「勉強することがたくさんあると思った。グループで取り組まなければならないとき嫌だなあと思うことがあるが、教員になったら必ず苦手な子に対しても向き合わなければ

ならないので克服したい」と述べ、印象に残る教員になりたいと決意を表明している。

5人以外の感想は、教職意識・授業内容・授業方法に区分できる。教職意識については、「教員の厳しさと難しさを感じた」「教員の仕事は授業であると思っていたが、生徒と接し信頼を得て同じ目線で考えないといけないことがいかに大切であるかを深く考えさせられた」「教員になりたいという意欲が高まった」「教員に対して自分の視点でしか見ることができなかったが、実際の事例などを通して見方が大きく変わった」「教員免許状が取得できるか不安になった」「教職を甘く見ていた、教師の大変さを知

った」と当事者意識を持って述べている。

授業内容については「主題が明確で分かりやすかった」「内容がしっかり理解できた」「暗記するだけでなく背景や過程を学ぶことができた」「流れを知り楽しく学べた」「先生の実際の現場の話が聞けて分かりやすかった」「講義を受ける前と受けた後のギャップが大きかった」と述べていた。

授業方法については「自分たちの意見を言い合う話し合いは面白かった」「ワークシートで学習履歴を確認できた」「レポートを作成しそのレポートをもとに話し合って深く理解できた」と述べていた。

表9 抽出した5人の受講生（A～E）の授業後の教師像と教職観

A	子どもから笑顔がもたらされた時に、教師としてのやりがいを感じる瞬間があるということは、子どもとの交流を図れるということは、教師という仕事だからと思っていた。日々研究することの多い現場だと感じる。
B	1つのことに一生懸命になれるのはとても重要であると思った。
C	様々な考え方を持っていて教師という仕事と対峙しているのだと改めて気づかされた。この年になると、中学校や高校の頃の恩師たちが何を考え何を目的として我々と向き合っていたのかがよくわかる。子どもからもらうエネルギーは教師という立場に立った時に、分かりうるものであり、教え子が巣立っていく姿を見る瞬間がどのようなものか、教壇に立って初めてわかるものでないかと思う。
D	人と関わる仕事なので思い通りにうまくいかないときもあるが、毎日新しいことにチャレンジし続けることができ、生徒とともに自分も成長できることが魅力であること人のかかわりの中で、己を成長させることができる。非常に魅力ある職業である。
E	なるべく全員と接しようとしても自分では気づかずに1人の子と多く会話をしているのを子どもはよく見ているので、子どもから教えてもらう点だと思った。学校行事等で熱心な先生は自分自身の体験でも印象に残る先生になるので、何年たっても忘れられない先生になりたいなあと考えた。

5. 研究の成果と課題

本研究では、「教職論」で用いたコメント・ワークシートの受講生の記述を通して、教師像と教職観を明らかにすることを研究目的として考察を進めてきた。本研究で明らかになったのは、以下の点である。

(1) 受講生は「熱意があり、生徒のことをよく理解し、授業も分かりやすく、しっかり指導でき、生徒の相談によく乗れる」教師を目指しているが、学校現場の教員に対しては組織や人間関係に苦労している姿をイメージしている。

抽出した5人の受講生の記述をみると「生徒理解」「熱意」を重視しているが、「指導」の側面が弱い。教職意識については学び続ける教員、様々な考え方に柔軟に対応できる、子どもからエネルギーをもらえることを挙げ、教員の大変さとやりがいを感じる受講生も多くいた。学年・教科による教師像と教職意識の多様性は3章で述べた。

(2) 具体的な指導場面を設定して、教員の役割や職責を理解させ、それを通して自分が目指す教師像をもたせ、自己の資質と能力を高めて

いこうとする意欲を持たせることができた。記述が少なく理解が十分でない課題もあったが、総合的に見て当事者意識をもたせることができたと考える。

(3) 教師の立場で考えさせ、教師としての心構えをもち、自己の在り方や課題を考えさせようとしたが、受講生の評価をみると教師の立場で考え、心構えをもたせることについては改善が見られた。自己の在り方や課題の探求については他の科目を含め継続して指導していく必要がある。

(4) 毎回ワーク・コメントシートに自分の意見を書かせ、適宜グループで話し合わせたことにより、学習意欲を高め、内容の理解を深めることができた。

(5) 対話型の学習に拒否反応を起こす受講生がいることを想定したが、どの受講生も参加し、発表では役割分担を自分たちで決めて、要所を押さえた説明ができていた。

今後の課題として以下の点が挙げられる。

(1) 授業担当者の中等教育での教職体験と最新の資料を取り込んで授業を展開したが、学校現場の様子を見ていない1～2年生には実感が持てず理解しにくい内容もあった。教員社会、ライフコースについては他科目の学習内容を考慮しながら、内容構成等を検討する必要がある。

(2) 受講生のほとんどが低学年で学校現場の教育関係にとらわれず、教職に対する批判が述べられる環境にあることを保証し、ワーク・コメントシートの評価は、しっかり自分で考えて書けているかを評価すると伝え、自由に考え意見を述べさせたが、各受講生のもつ問い・課題を解決し、教師観や教職観を再構築していく手立てを示す必要がある。

(3) 研究においては、複数年にわたって受講

生の教師像と教職意識の傾向を把握するとともに、今回対象とした受講生を4年生の秋学期科目「教職実践演習」を履修するまで追跡して、教師像と教職意識がどう変化してきたかを明らかにしていく必要がある。

参考文献

新井保幸・江口勇治編『教職論』培風館、2015年、全218ページ。

岩田康之「教員養成改革の日本的構造—「開放制」原則下の質的向上策を考える—」『教育学研究』第80号第4号、2013年、14—26ページ。

金丸洋子「教職を目指す学生の当事者意識の現状と課題—「教職論」の実践から—」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第8号、2015年、13—20ページ。

榊原禎宏・高橋英児・大和真希子「教員養成の教育内容・方法の共通性・多様性と大学教員の職能開発(2)—「現代教職論」を事例にして—」『教育実践学研究』第10号、2005年、51—69ページ。

霜川正幸・村上清文・岸本憲一良・佐々木司・鷹岡亮・高橋雅子・中村哲夫・西岡尚・長谷川裕「教育学部入学生の教職キャリアに対する意識の違いについて—教職スタート科目「教職概論」の授業改善に向けて—」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第31号、2011年a、23—35ページ。

霜川正幸・村上清文・岸本憲一良・佐々木司・鷹岡亮・高橋雅子・中村哲夫・西岡尚・長谷川裕「学生の授業満足度から見た授業形態と内容のあり方について」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀

- 要』第31号, 2011年b, 37-47ページ。
- 霜川正幸・村上清文・鷹岡亮・高橋雅子・長谷川裕・久保田尚「「教職概論」における授業改善の実際」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第33号, 2012年, 77-84ページ。
- 下地秀樹「教職履修の総括としての「教職実践演習」から「教職概論」へのフィードバックを考える」『教職研究』第27号(臨時創刊)(立教大学教職課程), 2015年, 119-128ページ。
- 田代直人・佐々木司・金田重之・川野哲也「教職科目「教職論」のカリキュラム開発に関する一考察(Ⅰ) —大学のテキスト分析を中心として—」『山口学芸大学研究紀要』第3号, 2012年, 1-15ページ。
- 田代直人・佐々木司・金田重之・川野哲也「教職科目「教職論」のカリキュラム開発に関する一考察(Ⅱ) —大学のテキスト分析を中心として—」『山口学芸大学研究紀要』第4号, 2013年, 15-37ページ。
- 高橋英児・榊原禎宏・大和真希子「教員養成の教育内容・方法の共通性・多様性と大学教員の職能開発(1) —「現代教職論」を事例にして—」『教育実践学研究』第9号, 2004年, 23-45ページ。
- 中瀬浩一「「教職概論」の授業理解と教職に関する意識の検討」『同志社大学教職課程年報』第5号, 2015年, 17-28ページ。
- 中西仁「「教職概論」における教職課程入門の試み—学校・教職の現状を語ることを通して—」『同志社大学教職課程年報』第4号, 2015年, 37-48ページ。
- 山崎明宏「公立学校教員の職責を促す「教職概論」の授業実践に関する研究」『ブール学院大学研究紀要』第53号, 2012年, 203-215ページ。
- 山崎清男「「開放制」教員養成制度の意義と問題点—教職課程履修学生に意識調査を中心にして—」『大分県立芸術文化短期大学紀要』第18号, 1981年, 1-12ページ。
- 大和真希子・榊原禎宏「教職専門科目における学習先行型の授業の試み—「現代教職論」を事例として—」『教育実践学研究』第8号, 2003年, 33-45ページ。